

CISMOR Young Scholars' Workshop
CISMOR 一神教学際研究会 2020-2

2020年11月28日(土)
オンラインワークショップ (ZOOM platform)

プログラム

第1部(10:30-12:05)

10:30-10:35 開会の挨拶 - アダ タガー・コヘン
同志社大学神学研究科教授、一神教学際研究センター センター長

10:35-11:05

辻坂 真也 同志社大学神学研究科博士後期課程
「古代メソポタミアにおける玉座の機能」
コメンテーター 前川和也先生

11:05-11:35

浅野 けやき 同志社大学神学研究科博士前期課程
「ヘブライ語聖書における זנה と קדשה の比較」
コメンテーター 石川立先生

11:35 - 12:05

新井 雅貴 同志社大学神学研究科博士後期課程
「ヘブライ語聖書における冥界描写にみる死者 רפאים の性質」
コメンテーター 北村徹先生

休憩： 12:05～13:10

第2部(13:10-15:20)

13:10-13:40

河合 竜太 同志社大学文学研究科博士後期課程
「ドイツ帝政期ベルリンのユダヤ人と民族主義 —— 体操団体 バル・コホバ を事例として」
コメンテーター 勝又悦子先生

13:40-14:10

石井田 恵 同志社大学神学研究科博士後期課程
「戦後日本におけるキリスト教シオニスト団体のイスラエル支持の動機についての考察」
コメンテーター 石黒安里先生

休憩: 14:10-14:15

14:15-14:45

長砂 翼 同志社大学神学研究科博士前期課程

「ジャボティンスキーの諸相——ピアリク宛書簡から」

コメンテーター 平岡光太郎先生

14:45-15:15

岡崎 祐貴 同志社大学神学研究科博士後期課程

「エマヌエル・ヒルシュの神学的歴史理解と政治的言説の関連性について」

コメンテーター 水谷誠先生

15:15-15:20 - 閉会の挨拶

アダ タガー・コヘン 同志社大学神学研究科教授、一神教学際研究センター センター長

司会: 北村 徹 一神教学際研究センター特別研究員、神学部嘱託講師

コメンテーター：メインコメンテーターを指名させていただいておりますが、他の方の発表へのコメントも歓迎いたします。

前川和也 京都大学名誉教授、国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員

水谷 誠 神学研究科・教授

石川 立 神学研究科・教授、CISMOR リサーチフェロー

勝又悦子 神学研究科・教授、CISMOR リサーチフェロー

北村 徹 一神教学際研究センター特別研究員、神学部嘱託講師

石黒安里 日本学術振興会特別研究員 PD(北九州市立大学)、CISMOR リサーチフェロー

平岡光太郎 神学部嘱託講師、CISMOR リサーチフェロー

要 旨

第1部

辻坂 真也

古代メソポタミアの歴史において古代シュメール人は、文化、言語、そして宗教などに多大な影響を与えている。その中でもシュメール人が最後に活躍した時代である、ウル第3王朝では、王や神の玉座が、死者の供養や、神の崇拜などの儀礼において度々登場していたことが確認できた。本研究ではこの時代における玉座が現れるテキストを検討し、それらの機能や、そうした役割を得るに至った背景などを分析する。

浅野 けやき

本発表では、ヘブライ語聖書に表れるזנהとקדשהという二つの単語の比較検討を行う。この二つは、ヘブライ語聖書のなかで、どちらも娼婦を表す単語として使われている。しかし、これらの単語が使用されている本文を比較すると、それぞれが一貫してすべての箇所では娼婦を表しているわけではなく、またזנהとקדשהが必ずしも同一のものを表しているわけでもないことがわかる。今後、神殿や公共空間における女性の役割を明らかにするうえで、まずこの二つの単語がそれぞれ意味するところを聖書本文から明らかにするのが本発表の目的である。

新井 雅貴

本研究は死者を意味するヘブライ語のひとつである **רפאים** に着目し、冥界 **שאול** の描写に基づくヘブライ語聖書の死生観に照らし合わせてその性質を考察することを目的とする。

死者の意味での **רפאים** は合計 8 回現れ、そのうち 4 箇所では **שאול** と共に言及される。この **שאול** はしばしば墓との繋がりを否定された場所として描写され、この点から、**רפאים** は、ヘブライ語聖書において墓に埋葬された死者とは区別できることが伺える。

第 2 部

河合 竜太

レオポルト・ツンツを創立者とするベルリンの改革派男子学校の体育館は、1890 年代末になると、ドイツに広がる反ユダヤ主義に抵抗姿勢を示し、シオニスト指導者マックス・ノルダウが提唱した標語「筋骨たくましいユダヤ人」に共感して、民族の再生を目標とする若者らが集う場となっていた。ユダヤ社会全体からみれば異端的な少数派であったこうした人々の集まりをまとめた団体がバル・コホバ・ベルリンである。本報告はこの団体を取り上げ、1898 年の創設から第一次世界大戦期までの約 20 年間の活動を、ベルリンのユダヤ社会との関係を視野に入れながら明らかにしたい。

石井田 恵

本研究発表では、戦後日本における主要なキリスト教シオニスト団体について取り上げ、彼らがイスラエルを支持する動機について考察する。各団体の間には、細かい思想的差異——とりわけ、終末論の違いが見られ、それが団体間の分裂を生む一因となっている。しかし、一方で、それらの団体の間に協力関係が見られることも事実である。そこで、本発表では、そのような実際の協力関係を手がかりに、彼らが目指すところを明らかにしたい。

長砂 翼

ゼエヴ・ジャボティンスキーはロシア生まれのユダヤ人で、シオニズム右派の指導者として活躍した人物である。そのことから、これまでの研究では政治的要素への注目が多く、本邦では先行研究の主題のすべてが政治的なものであり、他の面については着目されてこなかった。

本発表では、彼がユダヤの民族的詩人ハイム・ナフマン・ビアリクに宛てた書簡を取り上げ、当時のユダヤ世界における彼の文筆活動や社会的繋がりを明らかにする。

岡崎 祐貴

本発表は、エマヌエル・ヒルシュが国民社会主義ドイツ労働者党の権力掌握を支持するに至った神学的要因を、パウル・ティリッヒとの対論の際に用いた「律法の完成」という歴史理解の概念を手がかりとしつつ明らかにすることを試みる。福音は律法の完成とそれに対する逆説の二つの性格からなる。前者の過度な強調は福音を律法の単なる補助役とし、結果として現状に対する批判的視座の後退に繋がる可能性がある。ここにヒルシュの政治的決断の神学的脆弱性をみる。